
(令和6年6月26日掲載)

無自覚な差別どうなくす？



.....

上川 多実 (かみかわ・たみ)

「部落」にまつわる思いや考え、課題意識を表現・発信する情報発信サイト「BURAKU HERITAGE」のメンバー。現代の見えづらい差別について講演や展示などの活動を行っている。家庭では2児のシングルマザーとして子どもたちに「部落」をどう伝えたらいいのか悩みながらも実践中。単著に『〈寝た子〉なんているの？ 見えづらい部落差別と私の日常』（里山社）がある。

.....

「マイクロアグレッション」という概念をご存じでしょうか。目に見えないくらい細かい形で日常の中に埋め込まれている攻撃のことであり、多くの場合それが差別であるという意識がなく行われています。

部落問題におけるマイクロアグレッションの代表的なものの一つとして、「そんな差別今でもあるの？」という「素朴な疑問」をぶつけられがち、というものがあります。まさかこれが差別だなんて…と驚かれるかもしれませんが、部落出身者である筆者の視点からこの発言について考えてみてください。

私は関西の部落出身の両親のもと、東京の部落ではない地域で生まれ育ちました。学校では部落問題について詳しく学ぶ授業はなく、周囲には「部落」という言葉そのものが通じないという環境でした。しかし一方で、結婚差別や就職差別は身近なところで起きており、学生の頃の私は将来結婚や就職ができるのか不安を抱えていました。そして友人に相談をすると、決まってこの言葉をかけられるのです。「そんな差別今でもあるの？」

もちろん友人たちには悪気はなく、感じた疑問をそのまま口にただけなのでしょう。しかし私はこの言葉にダメージを受け続けました。自分が抱えさせられている差別への不安や恐怖が、友人たちの中では「そもそもこの世に存在していない」かのように扱われていることをまざまざと見せつけられるからです。

このやりとりが一度きりなら、私自身も「ちょっとモヤモヤするな」くらいにしか感じなかったかもしれませんが。しかし相手が変わるたびに毎回繰り返されることでモヤモヤはどんどん大きくなり、「部落問題なんて解決のために社会で取り組む必要はない。だから知らなくてもいいのだ」と、自分の存在が否定されているように感じていきました。

マイクロアグレッションは一見すると差別とまでは言えない「ちょっとしたこと」と捉えられがちなのですが、日常的に遭遇する頻度が高いためにダメージの蓄積が膨大となり、心身に深刻な被害を与えられていると言われています。

こんなふうにはマイクロアグレッションを紹介すると、よくある反応として「これじゃあ何も言えなくなりそう」というものがあります。確かに、悪気なく発した言葉が差別だと指摘されたら戸惑うのも当然です。

では、私たちはマイクロアグレッションにどう対処していけばいいのでしょうか。私はまず、差別は単に個人の意識の問題なのではなく、社会が生み出しているものだという認識を持つことが大切だと考えています。

「そんな差別今でもあるの？」を例にすれば、部落差別を今ここにあるものとして学び、なくしていくための仕組みがしっかり存在している社会であれば、「そんな差別今でもあるの？」なんて発言はそもそも生まれてこないでしょう。

マイクロアグレッションの具体的な事例を学び、「こういうことは相手を傷つけてしまう」と気付けることも大切ですが、それでは根本的な解決にはなりません。この社会には知らないうちに差別を生み出し、維持してしまう仕組みがあり、差別をなくしていくにはそんな社会の仕組みを変えていく必要があるのです。まずはその仕組みに気付くことから始めてみませんか？